

# 野生植物と栽培植物の境界と 生業との関係性

Relationship between the Boundary Dividing Wild Plants  
and Cultivated Plants and Livelihood

篠原 徹・西谷 大

SHINOHARA Toru and NISHITANI Masaru

はじめに一問題の所在一

①海南島リー族を事例とした焼畑と野生植物の関係性

②雲南省者米谷を事例とした野生植物利用

③考察

おわりに

## 【論文要旨】

畑・焼畑および水田の「周辺」でおこなわれている植物利用のありかたからみると、それらは野生植物と栽培植物の2つに区分できるほど単純な二項対立的な存在ではない。とくに焼畑は、水田や畑のように特定の種や数種の種に依存したのではなく、種の多様性や品種の多様性に依存した生産の場である。

焼畑およびその周辺では「保護」「移植」「許容」「忌避」という行為が、植物利用を持続的に維持するため長い期間を要する実験的な場になっており、それが栽培化と深く関係しているのではないか。こうした行為を可能にするためには、焼畑そのものが生み出す自然界とのあいまいな空間、「植えたもの」「生えてきたもの」という自然資源利用の慣習、土地所有を固定化しないあいまいな境界といった条件が保証されていることが必要である。

さらに1つの生業に特化せず、水田、焼畑、狩猟採集を、並列的・複合的におこなう生業形態が、より野生の有用植物の多様な利用を促し、人と植物との共創的な関係性が創出される可能性が高いといえることを主張したい。

【キーワード】 焼畑, 共創, 半栽培, 「植えたもの」と「生えてきたもの」, 生業の内部化, 複合的生業